

取手市埋蔵文化財センター第2回企画展

本多作左衛門重次と 子孫たち



平成12年8月8日(火) - 10月6日(金)

展示
説明

8月12・13・16・23・26・27日 9月9・10・23・24日(9月9日は午前のみ)
午前11時と午後2時
予約不要・その時間に展示室にお出てください。

- 開館時間 午前10時から午後4時30分
(入館は4時まで)
- 月曜日休館
- 入館無料

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007 茨城県取手市吉田383
TEL.0297-73-2010
FAX.0297-73-5003

開催にあたって

この度取手市埋蔵文化財センターでは、第2回企画展「本多作左衛門重次と子孫たち」が開催されることとなりました。

本多重次は、三河譜代の家臣として徳川氏に仕え、戦場では幾多の功績をあげるとともに、三河三奉行の一人としても名高い人物であります。その重次は、天正18年（1590）に家康が関東に入国すると上総国に、次いで現在の取手市域の井野に知行地（領知）をたまり、慶長元年（1596）7月16日に井野で亡くなっています。すなわちここ取手は最晩年の数年間を過ごした地であるとともに、終焉の地でもあるわけです。さらに子孫は旗本となって再び取手に知行地をたまり、明治維新まで続いています。

重次を祖とする旗本本多家と取手の人々とのつながりは、昭和初年の重次の墓の県史蹟指定運動や三百五十年法要、さらには昨年よりはじめられた「頑固者賞」へと、形をかえて存続しています。数百年の時をこえて、重次は今なお取手の大地と私たちの心の中に生き続けているとも言えましょう。

この企画展では、いまだ調査不足の点は多々ありますが、重次のみならずその子孫たちと、取手をはじめとするゆかりの地の人々とのかかわりを、江戸時代から現代にいたるまで通観したいと考えています。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたりご協力をたまりました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成12年8月

取手市埋蔵文化財センター

歴史講演会

「本多重次と井野郷」

銚田町史編さん専門委員

元法政大学講師

佐々悦久氏

日時：9月9日（土）午後2時から3時30分

場所：埋蔵文化財センター2階講座室

定員：40名

茨城県観光協会・県観光物産課共催



主な参考文献

『取手市史』近世史料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、通史編Ⅱ、石造遺物編、『新編岡崎市史』2中世、6史料古代中世、『増補改訂丸岡町史』、『丸岡城略史』、『近世の武家社会』（国立歴史民俗博物館企画展示解説図録）、『三河武士のやかた家康館常設展示解説書』、三浦俊明氏「三河三奉行について—本多作左衛門を中心として—」『戦乱と人物』所収、後に『戦国大名論集12徳川氏の研究』に再録

例言

1. このパンフレットは、平成12年8月8日から10月6日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第2回企画展「本多作左衛門重次と子孫たち」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました。

稲生正光氏、飯田秀氏、海老原清氏、海老原恒久氏、野口幸子氏、広瀬誠之氏、本願寺、本多裕江氏、一筆啓上・作左の会、茨城県立歴史館、大阪城天守閣、岡崎市美術博物館、岡崎市立六ッ美西部小学校、国立公文書館内閣文庫、国立歴史民俗博物館、埼玉県立文書館、常陽史料館、筑波大学附属図書館、土浦市立博物館、利根町歴史民俗資料館、松戸市戸定歴史館、丸岡町役場、丸岡町文化振興事業団、龍ヶ崎市歴史民俗資料館

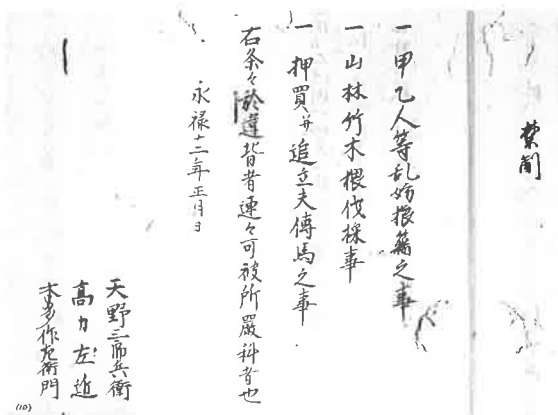
本多重次の生涯

重次は、享祿2年（1529）に三河国額田郡大平村（現愛知県岡崎市大平町）に生まれました。大平村の西方、宮地村（現同市宮地町）にある犬頭神社は本多氏の産土神とされ、境内には明治38年（1905）建立の「三河三奉行本多作左衛門重次誕生地之碑」があります。本多氏は、室町時代から戦国時代に三河国に興った武士団の一つで、藤原氏の流れをくむと称しています。そして、最も古くから松平家（後の徳川家）に仕えていた譜代の家臣団でした。重次も、7歳の時から松平清康（家康の祖父）に仕え、以後広忠（同父）、そして家康と仕えています。

永祿8年（1565）に家康が三河国を平定すると、重次は高力清長、天野康景とともに三河三奉行に任命されます。「仏高力、鬼作左、どちへんなしの天野康景」とはこの時のことばとされていますが、実際の三奉行の任命は永祿10年以降のようです。また三奉行も、高力清長のかわりに稲垣という人物を入れる説などもあるようです。

「鬼作左」と呼ばれた重次ですが、江戸時代の宝永6年（1709）に書かれた「武野燭談」には、重次が高札の文字をかな書きにしたところ人々が内容をよく守るようになったことや、家康が釜茹での刑に使う釜を安倍川の河原から浜松に運ばせた時、これを見た重次が釜を打ち砕いたことが、書かれています。これらをただちに歴史事実とみなすことはできませんが、重次の人となりを示す逸話といえましょう。

天正14年（1586）、岡崎に下向した豊臣秀吉の母大政所の宿舎の周囲に薪を積み上げ、上洛した家康の身に異変が起こった際には火をつけようとしたことなどが秀吉の不興をかい、天正18年の家康の関東入国時に上総国古井戸に三千石を賜り、諸役を許されました。後に現取手市域の井野に移され、慶長元年（1596）7月16日に68歳で没しています。菩提寺は、市内の青柳の本願寺です。



永祿12年1月 三河三奉行制札（本多裕江家文書）



「武野燭談」〈筑波大学附属図書館蔵〉

本多重次略年譜

享祿2	1529	三河国大平に生まれる
天文4	1535	家康の祖父松平清康に仕え、以後家康の父広忠、家康に仕える
永祿元	1558	家康が初陣で三河国寺部城を攻めるのに従う
永祿6	1563	三河国一向一揆の時、宗旨を浄土宗にかえ、一揆の鎮定に尽す
永祿7	1564	今川氏真との合戦で奮戦して、家康より賞詞をたまわる
永祿8	1565	家康、三河国を平定して重次を高力清長、天野康景とともに奉行に任命する （実際は永祿10年以降）
元龜元	1570	三河・遠江が暴風雨の被害を受け、三奉行が救済にあたる
元龜3	1572	三方ヶ原の合戦で家康が武田信玄に敗れた時にしんがりをつとめ、武田軍の追撃をかわす、また浜松城に兵糧を貯え、家康に賞賛される
天正元	1573	武田信綱と戦い、戦功をあげる
天正3	1575	長篠の合戦で奮戦して、右目を切りつけられる
天正4	1576	家康、重次の屋敷に赴き、刀をあたえる
天正9	1581	遠江国高天神の合戦で奮戦する
天正10	1582	駿河国一国の政務を司る
天正12	1584	長久手の合戦で尾張国星崎城を守る 尾張国蟹江城を攻める時、先鋒をつとめる
天正14	1586	家康が上洛した際、人質として岡崎に下向した豊臣秀吉の母の大政所の宿舎に薪を積み上げ、秀吉の不興をかう
天正18	1590	小田原の陣で奮戦する、家康の関東入国の時に上総国古井戸に3000石をたまわり、諸役を許される、後に下総国井野に移される
慶長元	1596	7月16日、井野で没する、68歳、青柳の本願寺に葬られる

『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』、本多家文書より作成

一筆啓上の手紙

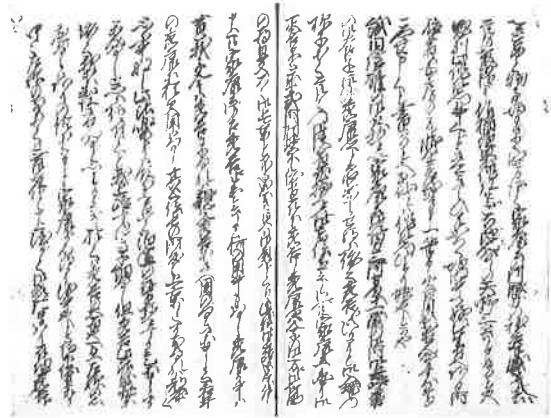
重次というと、「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の簡潔にして要領をえた手紙を書いたことで、大変に有名です。しかし、江戸幕府が編さんした大名・旗本の系譜集である『寛永諸家系図伝』や『寛政重修諸家譜』、幕府の歴史を記した『徳川実記』には、このような話は書かれていません。もとより幕府が編さんした公式な系譜集や歴史書に、家族にあてた手紙のような私的な事柄は掲載されないことでしょう。

寛永16年(1639)に生まれ享保15年(1730)に亡くなっている兵学者大道寺友山が書いた「岩淵夜話」には、重次の手紙の文面を「一筆申 火の用心 おせんなかすな 馬こやせ かしく」としています。ところで「岩淵夜話」では、「おせん」を重次の子の仙千代ではなく重次の娘としています。堀田正敦らが前後11年をかけて天保8年(1837)に完成した旗本の系譜集である「干城録」には、この「岩淵夜話」を引用して手紙の記事が掲載されています。神沢貞幹の筆になり、寛政3年(1791)に完成した全200巻にも及ぶ大随筆集「翁草」にも手紙の話が出ていますが、文面は「一筆申す 火の用心 おせん病すな 馬肥せ」で、これまた少し違います。

明治以降に出版された本では、明治21年(1888)刊行の『茨城県名勝志』、同33年刊行の『茨城県名勝志全』、大正4年(1915)刊行の『相馬霊場案内』などに重次の墓が紹介されていますが、手紙の話は出てきません。大正7年刊行の野口如月著の『北相馬郡志』には4頁にわたって重次の記事が掲載されていますが、やはり手紙の話は出てきません。重次といえば一筆啓上の手紙という現在の発想の中では、どこか奇異な感じをうけます。一方昭和9年(1934)10月8日付けの「取手たより」245号には、「一筆啓上 火の用心 お仙なかすな 馬肥せ」と手紙の文面が出てきますが、昭和29年に北相馬地方事務所が発刊した『北相馬郡勢要覧』では「又一筆啓上仕る、おせん泣かすな馬肥せ」となっていて、またまた少し違います。重次の手紙の真相は、本当はよくわからないのです。



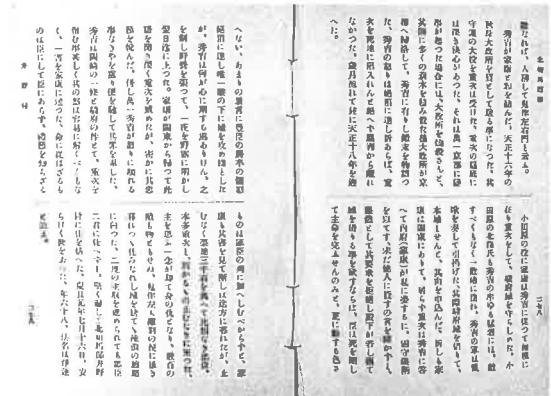
一筆啓上の碑 (本願寺境内)



「岩淵夜話」 (筑波大学附属図書館蔵)



「翁草」 (筑波大学附属図書館蔵)



「北相馬郡志」 (故野口多藏家文書)

重次の子孫

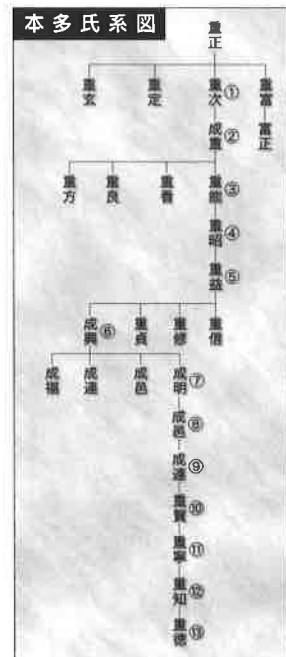
重次の子の仙千代（後の成重）は、天正4年（1576）家康が重次の屋敷を訪れた時にはじめて家康にまみえ、脇差を賜りました。天正11年から家康に仕え、同12年に家康と秀吉の和睦が整うと人質として京都にゆきます。しかし翌年和睦が破れると、重次はひそかに成重を浜松に呼びもどし、やはり秀吉の不興をかいます。

天正18年以降、成重は重次とともに上総国古井戸そして井野と移り住みます。慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦で戦功をあげ、近江国蒲生郡に二千石を加増されます。慶長18年には福井藩主松平忠直の家臣となり越前国に赴き、四万石をたまわり丸岡城に入ります。成重は、続く大坂冬の陣・夏の陣でも奮戦して家康・秀忠の賞賛するところとなります。この頃も重次からの井野の領知を成重は持ち続けていたようで、元和8年（1622）には秀忠から「井野郷桑原村青柳村」で烏をとってもよいとの黒印状をもらっています。元和9年（1623）に松平忠直の不行跡で福井藩がとりつぶされると、翌年成重は六千三百石を加増され四万六千三百石ではれて丸岡藩主となります。

成重の後には重能、重昭、重益と続きますが、重益の時に家臣間に争いが起こり、これがために元禄8年（1695）に丸岡藩はとりつぶしの憂き目にあいます。同14年、本多家の一族17人が本願寺に参集して重次の菩提をとむらい、本多家の再興を願っています。重益は宝永6年（1709）にゆるされ、翌年6代将軍家宣に拝謁し下総国相馬郡に二千石の領知をたまわります。この二千石は、現在の取手市の青柳と桑原、そして藤代町の和田の3ヶ村にありました。旗本となった本多氏は、以後代々この二千石を治めて明治維新をむかえるのでした。村では、重次の墓である「御霊所」や「御玉垣」、重次の位牌や厨子の修理をその時々におこなっています。明治になってからも、本多家の先祖法事に青柳村の農民が寄附をしており、本多家と村の農民とのつながりが続いていたことがうかがえます。

慶長7年10月2日 本多成重宛
徳川家康黒印状
〈本多裕江家文書〉

元和8年10月22日 本多成重宛徳川秀忠黒印状
〈本多裕江家文書〉



宝暦11年10月 青柳村御検
地以来御地頭付書上帳写
〈海老原清家文書〉

明治初年 日本多作左衛門
先祖法事寄附簿
〈海老原清家文書〉

元禄14年2月2日 御一家中御日牌領御連名写帳
〈海老原清家文書〉

重次の墓の県史蹟指定運動

先に見た『寛政重修諸家譜』には、重次は現在取手市内の井野で没したと記されています。しかし、これ以前に編さんされた『寛永諸家系図伝』には、上総国古井戸で死去したように書かれています。また新井白石が大名の家伝や由緒をまとめた『藩翰譜』には、重次は上総国北原、または小原で亡くなった書かれています。さらに頼山陽が源平二氏から徳川氏までの武家の歴史を著した大ベストセラー『日本外史』には、やはり重次は上総國小原で亡くなったとされています。

このように、重次が井野で没したのが真実であるにもかかわらず、一方では上総国で没したかのような説が流布していたわけです。このことを非常に残念に思っていた時の本願寺住職本多貞俊氏は、井野村の有志とともに「井野村史蹟保存会」を結成して、台宿の通称お墓山にあった重次の墓を茨城県の史蹟に指定してもらおうべく、一大運動を展開しました。保存会の会長には井野村長の高島徳之助氏が就任し、理事には本多貞俊氏や本願寺の檀徒惣代、顧問の一人には井野村出身で裸一貫から正金商事株式会社を興した立志伝中の人物姥原万吉氏がなっています。

重次の墓の史蹟指定の申請を受けた茨城県史蹟名勝天然記念物保存顕彰会では、慎重な審議の結果昭和9年（1934）7月14日に史蹟指定を決定し、8月3日付けの『茨城県報』で告示されました。さてお墓山の重次の墓は、明治維新の後には次第に荒れ果て五輪塔などは本願寺の境内に移されていたようです。県の史蹟指定を受けると保存会では、すぐさま重次の墓の整備事業にとりかかります。昭和10年1月にたてられた復興記念碑の題額の「復興記念」の文字は、徳川慶喜の次に徳川宗家を継いだ徳川家達（家茂）が揮毫しています。おりしも昭和10年は重次の三百五十年忌にあたることから、保存会では本多重次氏三百五十年法要奉賛会を結成し賛同者を募り、同年11月10日には、重次の墓前で三百五十年法要が盛大かつ厳粛に執り行われました。



昭和11年1月1日「取手たより」号外（取手市教育委員会所蔵）



「史蹟復興秘史全」
（本願寺所蔵）

昭和9年8月3日「茨城県報」
769号（本願寺所蔵）



井野村史蹟保存会の記念写真（飯田秀氏所蔵）

平成5年（1993）、福井県丸岡町は重次が書いたとされている「一筆啓上」の手紙にちなみ、「一筆啓上賞」を創設しました。これは丸岡藩の初代藩主本多成重が、重次の子供であったことに由来しています。丸岡町では、これ以前から継体天皇の生母の振姫をテーマにした文学賞を設けていましたが、より多くの人に親しまれ応募してもらえる賞を作りたいと考え、ここに至ったのでした。そして第1回目は、「日本一短い母への手紙」として募集を開始したところ大反響を呼び、日本国内はもとより海外18ヶ国からも応募があり、その数は3万点をこえました。翌年には8次にわたる審査の末最優秀賞10点が選ばれ、入賞作など190点を掲載した本が発刊され、映画も製作されました。一筆啓上賞の第2回・第3回の募集には6万点をこえる応募があり、隆盛の中今年度は8回目をむかえています。

また重次の生誕の碑がたち、本多家の産土神とされる犬頭神社が通学区内にある愛知県の岡崎市立六ッ美西部小学校では、平成9年の学会会で6年3組が「三河武士 本多作左衛門」を上演しました。六ッ美西部小学校は、学年ごとに地域素材を発掘し、それを教材化することに取り組んできましたが、郷土の生んだ人物として重次が取り上げられたのです。最初は重次について何も知らなかった子供たちが、資料をさがしたり、聞き取り調査をしながら次第にイメージをふくらませ、自分たちで台本を作り、配役を決め、衣装や大道具・小道具も作って、クラス全員の協力で劇の上演を達成したのでした。特に最後の家康と重次の別れの場面は、見る人の涙をさそう出来栄でした。

取手市でも、重次が晩年を過ごした地にちなみ平成11年度には「頑固者賞」を創設してエッセーの募集をおこない、約2千点の応募がありました。今年度は7月1日から9月30日までの期間で、第2回の募集をしています。

岡崎市でも、重次生誕の地にちなみ平成11年12月26日に「一筆啓上・作左の会」が市民有志で結成され、「愛・夢・緑」の文字を刻んだ石を設置して誰もが気軽に座って休める「あよぶ運動」などを展開する計画でいます。



第7回一筆啓上賞賞状（丸岡町文化振興事業団提供）



「三河武士 本多作左衛門」の上演光景（岡崎市立六ッ美西部小学校提供）



一筆啓上・作左の会発会式（同会提供）



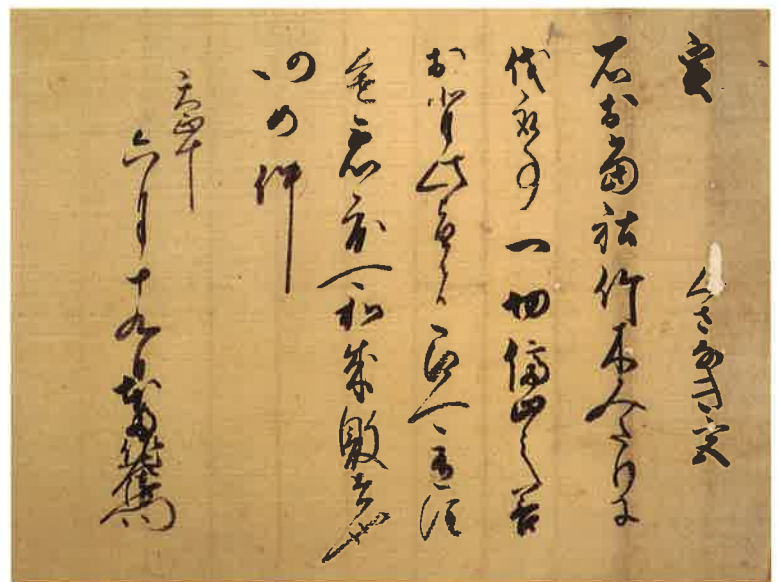
第1回頑固者賞表彰式（平成12年3月18日）



本多重次誕生地之碑 〈岡崎市宮地町犬頭神社境内〉



本多重次居城跡 〈貫河堂筆「大平古城蹟」岡崎市美術博物館提供〉



天正10年6月19日 草薙神社(静岡県清水市) 宛本多重次制札
 〈国立公文書館内閣文庫所蔵〉



本多重次着用の甲冑 〈本願寺所蔵〉
 この甲冑は、重昭、重知の甲冑とともに、本願寺本堂内に展示してあります。



丸岡町本光院の本多家四代の五輪塔、右から重次、成重、重能、重昭
 〈丸岡町役場提供〉